
ある朝の風景

清春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある朝の風景

【Nコード】

N0180E

【作者名】

清春

【あらすじ】

なんだか朝から言い合っている二人の風景です。恋愛風味だけどころかなり極薄ですから。ジャンルが恋愛はちょっと間違いです。

「ふぁー」

朝6時・起床

「まだ寝てたい……」

学校までは電車を使つて20分。
近からず遠からず。でも起床時間から考えると短いものだ。

「寝る寝る、まだ寝る！」

深夜番組見ていたから、あんまり睡眠時間は確保できてないし。
それに、いまは春。あつたかくて、ぽつかぽかの、春！

でも

「いつまでねてんだよ。だらけてんじゃねえぞ」

わたしに目覚ましなんていらぬ。だって、目覚ましがいづも朝きてくれるから。

「うう……今日だけ、今日だけだからッ」

「それ、何度目の『今日』だよ。起きる気がないなら俺が身ぐるみはがしてやってもいいんだぜ」

「なっ、なにを！？ばっ…、あんた、なんちゅーことを……」

「お前の身体なんて興味ねーよ。だいたい、お前、鏡の前でもう一度自分を見直したほうがいいんじゃないかねえの？」

失礼なことを言う「男」はごく自然にわたしの部屋に入ってきて、平然とした様子でオナノコに対して失礼なことを言う。ぜったい、クラスメイトの女子に嫌われてるに違いない！

いきなりお腹の辺りに冷たい感觸がした。

「ひい！？」

慌ててそこを見ると、やつの指がそこに……って、ちょっとおおお！????

「お前さー、やっぱ、春休みに太った？」

親指と人差し指で挟まれるわたしのお腹のお肉……
ぷにぷにとしたそれは、休み中のわたしの墮落の証だった。

「だってだって！受験ストレスから解放されたらケーキバイキングとか行きたくなるでしょ！？」

「そーか？俺、あんま甘いもん好きじゃないし」

「ああ、もう！なんでもいいよ、いいから部屋から出て行って！」

彼の背中を押して無理やり扉の外に出そうとするのだが、やつときたら「あーあ、折角のお前が言う『高校デヴュー』とやらは夢だったようだな」と嫌味なことを言うてくる。

そこまでいわれて引き下がれますか！

「そうでもないのよねー。それでも？クラスメイトの小倉君とか、C組の飯田君とかに一緒に休み出かけないかって誘われてるのよねえ」

ふふん、とわたしは得意顔をつくる。

まあ、実際は彼らの目当てはわたしじゃなくて、わたしの友達なだけだね。トホホ……

わたしの言葉を聞いたやつは綺麗に片方の眉をあげると、探るように見つめてきた。

……見つめられるとか、なんかはずいんだけど……。

「そいつらって入学して初めて会ったやつらだろ？ 出会って一ヶ月もしないのにそんな様子じゃ、どーせ遊びだろ。いくら男運がないからって、早まらない方がいいんじゃないでしょうかねー」

「は、はあああ！？ わたしのどこが男運ないって！？ …… あ、そっかー。 司くん、君ね、自分が女の子と縁がないから、わたしのことを妬んでるんだね？ あらやだー、可哀相」

口元に手をあててプツと噴出してやる。 大方、言ってることは相違ないでしょ。

司といえば…… 結構本気で睨まれた。 普段からよく睨まれるんだけど、当社比4割増しって感じ？

「…………… 悪いけどな、俺は好きな女と毎日会っている。 残念ながら、縁はあるんだろうな」

「へえ ……………… って、あんたに好きな女の子とかいるのッ！ ！ ！ ？ ？ ？ ？」

うそだー！ エイプリルフルはもうとっくに終わったぞ！？

だって奥さん、司ってば歳の割りになんかちよっと達観してるところあるし、妙に老けてるし、恋愛とか興味ねえよみたいな人なん

ですよ？彼が会社員だったら絶対恋人よりも仕事をとるタイプですよ？

だけど司の不機嫌そうな顔を見ると嘘とは思えない。

「へ、へえ。そ、それは、ぜひ恋がかなうといいわね……」

「てめえには言われたくないけどな。ま、とにかく……」

司は壁にかけてあるまだぴかぴかの制服をわたしに突きつけると、

「とつとつ着替えろ、あねき」

言葉の響きが耳慣れないものだったので一瞬眉を顰めてしまった。

あねき。

変換すると、

姉貴？

「うわ、呼ばれなれないって気持ち悪いね！」

「そこまで言うかよ、ひでえな」

「……司は姉貴って呼ぶの嫌なんでしょう？」

「嫌味だ、嫌味。もう二度と言うかよ」

なんだか冗談でホットケーキの中に胡椒をまぜてみたのを食べさせた時と同じような顔だった。

「早くしろよ、りな」

……うん。こっちのほうが、いいな。

「しっかしなー、小学生に呼び捨てとは舐められてる気がするわねー」

「中学だ、中学。もう小学とか卒業したわ、ボケ」

（後書き）

連載にしたいんですがいつになることやら。

こいつらは多分義姉弟。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0180e/>

ある朝の風景

2010年11月18日02時41分発行